

『実例詳解古典文法総覧』補遺稿

連載第11回 第4.3.1節～第4.3.6節

2018年6月1日

小田 勝

「4.3.1 る／らる」の続きから。100頁2つ目の◆の類例を追加する。

- ・立ちそめにし名の取り返へさるるものにもあらず (源・行幸)

101頁用例(9)は、本書の執筆時には注意しなかったが、「…られ+てしかな」で、「可能の願望形(…スルコトガデキタイ)」になっている(ように見える)。ただ解しにくい歌で、底本(新編国歌大観)の詞書を見ても、今ひとつよく分からない。ここでは比較的意の通る冷泉家時雨亭文庫本の本文をあげておく(冷泉家時雨亭叢書20、4ウ～5オ)。

- ・姫君の御方に、「来じと思へど来られけり、来むと思へど来られず」と聞こえたれば、宮聞こしめして仰せられたる、「頼むには(=来訪ヲ当テニシテイル時ニハ)しげさまされと思へども来られざらんはにくきことなり」。御かへし、
年を経てしげさまされる深山木の(=ノヨウニ)千世を経つつも(=長イ年月ガ経ッテモ) [姫君ノ許ニ頻繁ニ] 来られにしかな (=来ルコトガデキタイ) (高光集)

同頁用例(12)～(19)の類例をあげる。

- ・後鳥羽院に紫藤の板を一枚、人の参らせたりけるを、孝道を召されて見せさせ給ひけるに、「最上品の木にて候ふ。四枚には切られ候ひなん」とて(文机談・伏見宮本、1283年頃成)

102頁用例(24)以下は、自発態の格の問題。まず、用例(24)(25)の類例をあげる。

- ・見るたびに昔のことのおぼゆればまだそのままに月もながめず(基俊集)

自発の対象が「を」格で表示されることもある(川村大2012:173)。

- ・[夕顔ガ]おはせましかば、我らは[筑紫ニ]下らざらましと、京の方を思ひやらるるに(源・玉鬘)

同頁用例(29b)の角括弧は、初刷・2刷で「[女三宮ハ]」とあったのを、第3刷で「[女三宮カラ]」と改めた。なお「女三宮」は「ニョサンノミヤ」と読む(浅川哲也2015)。用例(28)(29)に関連して、次例は「昔が思い出される」という自発文であるとする、「給ふ」の敬意はその主語である発話者自身に向いてしまうから、この「られ」は受

身で、「給ひ」は受身文の主語「堀河帝の在位時代の昔」、すなわち堀河帝への敬意を表すのだろう。

- ・そも〔故堀河帝ノ〕昔の思ひ出でられ給ひて恋しきに（讃岐典侍日記）〈摂政忠実→作者〉

自発には命令形がない（§8.3.3）、というのは常識的な理解だが、和歌では次のような例がある。

- ・慣れて見し面影せめて忘れよ（=自然ト忘レテクレ）立ち添へばこそ恋しさも添へ（歌合Ⅱ88 金玉合）

103 頁「4.3.2 自発の打消形」。吉田永弘（2016）はこれを「否定事態の自発」と名付け、「る／らる」の用法としてきちんと位置づけた。本書でも、これにならって、節の名称を「否定事態の自発」としよう（第 4.4.2 節の名称も「否定事態の使役」となる）。自発では、例えば次のような節も立てられようか。

4.3.2' 自発による限定・不可能表現(新設)

「自然…される」→「…せずにはいられない」ということは、「…するばかりで、それ以外のことができない」ということでもある。次の自発表現は、「おそばに添って座っているばかりであった」（新全集訳）の意を表している。

- (1) 我は、御汗のごひ参らせつる陸奥紙を顔に押し当ててぞ、〔堀河帝ノ御遺骸ニ〕添ひみられたる。（讃岐典侍日記）

104 頁「4.3.4 動詞+得」の用例(3)は、初刷・2刷に、

(3) もし見給へ得ること（=何か見ツケ出セルコト）もや侍ると（源・夕顔）とあったのだが、括弧内の訳では下二段「給ふ」が訳されていない。「(=何か見ツケ出サセテイタダケルコト)」とすべきなのだが、そのように訂正すると行が 1 行増えてしまうので、苦肉の策として、第 3 刷では丸括弧部分を削除した。用例(10)～(12)の類例をあげる。

- ・恋ふといふはえも〔衣毛〕名付けたり言ふすべのたづきもなきは我が身なりけり（万 4078）

105 頁「4.3.5 アスペクト形式による可能表現」。用例(1)(2)の類例、

- ・うち出でもありにしものを (=打チ明ケナイデモイラレタノニ) [ウチ出デツレバ] かなかに苦しきまでも嘆く今日かな (和泉日記)

用例(5)の類例をあげる。

- ・「汝、この碑文を一度見て、そらに覚えてむや」と言ふ。王祭うしろ向きて、そらに誦するに、一字も落とさず。(蒙求和歌・詞書)

ただ、用例(3)～(5)の場合、可能の意を醸し出しているのは、「む」の方かもしれない。次例は、「むず」を用いて、未実現の事態について、その実現が可能であると推量するものである。

- ・思ひも寄らぬ時に押し寄せてこそ、思ふ敵^{かたき}をば討たんずれ。(平家 11 逆櫓)

また、次例のように「つ」「ぬ」も「む」も無くても可能の意を表し得る場合もあって(ただし次例第 1 例は用例(1)を踏まえた表現である)、

- ・よそにてはさびしく見えし山里をかくても人は住めば住みけり (正治初度百首)
- ・しかれば能因は人に、「すき給へ。すきぬれば秀歌は詠む」とぞ申しける。(袋草紙)

そうすると、第 4.3.5 節にあげた用例は、要するに「文脈上、可能の意が読み取れる例」ということになるのかもしれない。なお、用例(6)は、「ぬ」を含むとはいえ、「べし」が可能を表しているのだから、ここにあげるのは適切ではなかった(下線の引き方も用例(6)だけ異質である)。可能の「べし」は次の第 4.3.6 節に、「ぬべし」「つべし」で可能を表す例は 217 頁用例(10)(11)にあげられている。

[出典追加] 文机談④伏見宮本 = 『文机談全注釈』 / 歌合 II 88 金玉合 = 金玉歌合 (1303 年以後)

[引用文献追加] 浅川哲也 2015 「女三宮はニョサンノミヤー保坂本にある〈女御宮〉とその周辺」『言語の研究』(首都大学東京言語研究会) 1 / 吉田永弘 2016 「「る・らる」における否定可能の展開」『国語研究』 79